



織田 浩義
日本マイクロソフト
執行役員 常務

英語教育と国際感覚



笹山 幸嗣
MCo
代表取締役

1990年代に、仕事の都合で10年間アメリカで暮らしました。日本をたった時に1歳と3歳だった娘たちは、幼稚園から小学校までずっと現地の学校に通いました。同じ学年に日本人はおらず、補習校といわれる日本人学校にも通っていなかったため、自宅では日本語のみというルールにしていたにもかかわらず、すっかり英語環境に染まり、日本に帰国するころには姉妹の間では日本語よりも英語で会話するようになり、さまでした。

日本に戻り、4月、次女は公立小学校の6年に編入しましたが、ある日のホームルームでこんなことがありました。前年度末に異動をされた二人の先生と一人の事務の方に対するお礼として、全校集会で子どもたちが花束を渡すという行事が予定されており、娘の担任の先生が、その係をしたい人がいないかを子どもたちに尋ねました。

子どもたちとの接点が多かった先生方についてはすぐに何人かが名乗り出て決まりました。でも、事務の方についてはなかなか「私がやろう」という子が出てきません。後で聞いたことですが、先生も困って学級委員の子を指名しようと考えていたでしょう。その時、うちの娘が手を挙げて「先生、私やります」と申し出たのです。これには周りの子どもはもちろん、先生もびっくり。先生はあわてて「笹山さん、ありがとう。でも笹山さんは〇〇さんに会ったこともないよね」とおっしゃったそうですが、うちの娘は「大丈夫です。私ちゃんとできます」とまっすぐ先生の目を見て答えたそうです。

最終的に先生が別の子どもを指名して一件落着となったそうですが、その晩、先生からお電話をいただきました。事の顛末^{てんまつ}をうかがった後で、何でそんなことをしたのと娘に聞いたところ、娘いわく「だって誰もやろうとしないから、私がvolunteerしようと思って……。当たり前じゃない、そんなこと」。これを聞いて父は「……(???)」

ツールとしての英語を学ぶことと、日本と違う外国の感覚を身に付けることは、まったく別だと思い知らされたわが家の小事でした。最近では国際人を育てるために小学校から英語教育をという動きがありますが、本当に学ぶべきことは何かということ、今一度議論してもよいように思います。

▶▶ 次回リレートーク

中村 悟

M&Aキャピタルパートナーズ
取締役社長